

第15回オーライ！ニッポン大賞 受賞者一覧
都市と農山漁村の共生・対流推進会議（オーライ！ニッポン会議）

【オーライ！ニッポン大賞グランプリ】内閣総理大臣賞

① 株式会社 ^{しんしゅう}信州せいしゅん村 （長野県 ^{うえだし}上田市）

農山漁村イキキ実践部門

1998年地域住民7人が農村活性化を目的に集まり、2002年に農村のありのままの暮らしを体験する（農作業・自然散策・家庭生活を一緒に行う）『ほっとステイ事業』を民間事業として開始し継続している。2006年からは海外からの農村体験ホームステイ受入を開始。特に台湾からの訪日学生の半数近くの2,000人弱をHSで受入。その他、世界20か国から大人や子供・家族を受け入れている。また立科町・茅野市を始め県下7地区で展開している長野県ほっとステイ協会を設立し広域地域振興として取り組む。全域の年間受入者数は約2万人。拠点施設「農家レストラン里の食」や「Gファーム」を営業しつつ、信州大学、県立病院と農村の癒し効果についての実証にも取り組むなど、農村地域を守るために都市生活者や企業とも事業を展開している。



【オーライ！ニッポン大賞】

② 特定非営利活動法人 ^{たなだ}棚田ネットワーク（東京都 新宿区）

都市のチカラ部門

棚田を「記録する」「伝える」「交わる」「場をつくる」「つなぐ」「手伝う」という視点で、棚田地域での農作業体験・援農活動や棚田の多面的な機能に関する普及啓発活動を実施している。フィールドは静岡県松崎町（昔ながらの米づくり体験）、岐阜県恵那市（ヤマアカガエルの卵塊数を調査する観察会）、千葉県鴨川市（田植え・稲刈りの日帰り体験）など。環境関連の展示会に各地の棚田保全団体を誘って共同で出展し、棚田展示コーナーに来場する2千人以上の都市住民に棚田の魅

力を紹介、棚田関係者同士の相互交流にも貢献。また企業のCSR活動に協力し棚田ボランティア活動のコーディネーターも行っている。2017年秋に全国212箇所の棚田情報をまとめた書籍を出版。



③ 南砺市商工会利賀村支部 & 慶應義塾大学牛島ゼミ利賀プロジェクト
(富山県 ^{なんとし}南砺市) 若者カツヤク・農山漁村イキイキ実践部門

高齢化、過疎化が進む地域に賑わいを創りだしたい農村側と過疎化産業史、経営史を学ぶ大学のゼミが協力して、学生が利賀村の生活や習慣を学びながら、都会の目線で利賀で面白いと思うことをプロジェクトにして実施。焼き畑での赤かぶ栽培、利賀の自然を楽しむツアーの企画・実施、利賀人の魅力発信ムービーの制作など毎年さまざまなプロジェクトを行っている。若者が「やりたい」と思える環境づくりを目指した結果、村の行事の参加者も増え、貴重な担い手として機能している。学生等は500人来訪、民泊は17軒に増加、移住者は12組、22人になるなどゼミ生が通う結果として地域活性化につながっている。今までにない若者との体験が山間地の人々を元気にしている。



④ ^{おばましあの}小浜市阿納体験民宿組合 (福井県小浜市) 農山漁村イキイキ実践部門

県内外の小中学生を対象に、釣り堀でマダイを釣り、釣った魚をさばいて食べる体験学習を実施している。沖合の養殖イカダや餌やりの見学等を行う漁船クルーズ、同地区の主要農産物である梅もぎ体験・梅ジュース作り、同地区のお寺での座禅体験など、地域の関係者が一体となって体験メニューを開発し毎年県外の中学校や旅行代理店等を訪問し、積極的にPR活動を展開している。平成26

年度から新たにシーカヤックを導入して 100 艇体制。体験学習の利用者数は、2016 年には 4,851 人と大幅に増加、この体験学習が牽引する形で、当地区の漁家民宿への宿泊者数は順調に増加している。漁家経営が改善した結果、現在、組合員 13 戸のうち 11 戸は後継者が確保されている。



【オーライ！ニッポン大賞 審査委員長賞】

⑤ ウーフ WWOOF ジャパン事務局（北海道 札幌市）都市のチカラ部門

全国各地に 440 軒の WWOOF（ウーフ）ホスト農家が存在している。ホストの家のお手伝いをする人をウーファーと呼び農家の手伝いをする代わりに、毎日の食事と寝る場所を提供してもらい、さらに、農業の技術、農の知恵を授かるシステムを 1994 年から運営。ホスト農家とウーファーが家族のようになって、どうしたら人はより良く暮らしていけるかなど考えながら、一緒に会話を楽しむ。農村生活の体験と有機農業農家の支援を行うなど、都会と地方、人と人との橋渡しを進めている。



⑥ こや 古屋でがんばろう会（京都府 あやべし 綾部市）農山漁村イキイキ実践部門

京都府綾部市にある集落「古屋（こや）」は、平均年齢 90 歳のおばあちゃん達と自治会長の 4 名が暮らす限界集落。住民の間で「自分たちの代で集落を終わらせたくない」という想いが高まり、10 年前に一念発起し、近くの森で採れる枳の実を使って、お菓子等の開発・製造をはじめた。「古屋でがんばろう会」は、古屋の活動を支えるために設立された自主応援組織で、ボランティアを巻き込んだイベントの企画・実施をしている。交流人口は 3,000 人にもものぼり、おばあちゃんたちの生きがい

となっている。



【オーライ！ニッポン ライフスタイル賞】

⑦ よしだ みつはる (栃木県 かぬまし 鹿沼市)
吉田 光春

東京から移住し、ブルーベリーを栽培しながら週末カフェ「里のカフェはな」を夫婦で経営。ブルーベリーと黒豆を中心にカフェで使うレタス・大根・ニンジン・さつまいも等を栽培。7月～8月のブルーベリー収穫時期は早朝5時から摘み取りをはじめ、選果、加工、料理と忙しい日が続く。黒豆は6月播種、10月は枝豆の販売、12月には黒豆の収穫・乾燥・調整。カフェの営業は金・土・日曜日の三日間。2015年10月加工所の免許を取得し、ジャムの製造を開始。2016年10月菓子製造業免許取得し、マフィン等の製造を始めた。2017年3月仕出しの免許を取得して、弁当作りと多様な料理や加工品が作れる環境を創出。自家製ブルーベリーや野菜、地域の新鮮な野菜や果物を使った手作りランチやスイーツを提供。



⑧ いながき しんじ (富山県 ひみし 氷見市)
稲垣 信志

2015年4月氷見市地域おこし協力隊に着任、同年5月に氷見市仏生寺地区脇之谷内集落にある空き家に妻と2人で移住。2017年4月に入居している家を購入。地域おこし協力隊退任後の起業準備として農業を中心した年収250万円で移住者が暮らせる環境づくりを目指し、2016年から営農組合脇之谷内に所属して、5反の水稲、2反の畑を管理している。また、地域と都市農村交流事業として、サツマイモの生産から加工・販売、民芸品体感ツアー、サツマイモ収穫体験ツアー等3年間で32

本のイベントを企画運営、地域住民・都市住民の関係人口は 1,000 名を超える。また、地元高齢者が活躍出来る 6 次産業化の取り組みや市内の福祉事業者との地域密着型農福連携も行っている。



⑨ きんじょう あい (愛知県 東栄町)
金城 愛

3 年前に「奥三河で暮らすように遊ぶ」をコンセプトに「体験型ゲストハウスだのん」を立ち上げた。「だのん」はこの地域の方言で「そうだね」の意味。5 年前に縁あって訪れた東栄町。初めての田舎暮らしで慣れないことだらけの私に居場所を作ってくれた地域の皆さん。皆さんの暮らしから、「生きていくことはシンプルでいい」ということに気づかされた。田舎暮らしは手作りが基本。テーブルやイス、味噌やこんにゃくなど、すべて当たり前のように自分で作り、この価値をより多くの人に伝えたい。地域の人とかかわりながら感謝の気持ちを伝えたいと宿泊者に東栄町の「人」と「暮らし」に焦点を当てた体験メニューを提供している。



⑩ つじもと きょうこ (愛媛県 西予市)
辻本 京子

トマト栽培を始めていた知人の誘いで、2002 年に遊子川を訪問。農業経験は無かったが「トマトが大好き」という思いから主人を説得して奈良県から移住。3 年後に休耕地を買い取り、2012 年には、トマト農家の女性を中心に 20 名で規格外トマトの加工商品開発をはじめ、『遊子川特産品開発班』の代表を努める。2014 年 4 月から農家レストラン「食堂ゆすかわ」をオープン。同時に商品開発を進めていた自家製「トマト酢」を使った『トマトユズボン酢』の販売をスタート。仲間とともにトマトの加工作業、レストランでの調理、さらに、ご主人と一緒にトマト栽培に取り組む多

忙な日々を送っている。



⑪ なかがわ たかし
中川 孝 (熊本県 荒尾市)

荒尾市の農家出身、家電メーカーに勤務していた 40 代のとき海外出張で見たワイナリーとなだらかに続くぶどう畑を見て「いつかこんな風景を故郷に自分の手でつくりたい」と夢を抱く。58 歳の時、実家に戻り、故郷の荒廃した風景を見て何とかしたいという思いに駆られ、40 代で見たあのワイナリーの景色が甦り思い浮かびオリーブ畑を作ろうと耕作放棄地を購入。オリーブの木を植え始め少しずつ植えて今では 1,000 本。2016 年から実の収穫も始まりオイルが搾れ、2017 年 7 月にレストラン「Omegane (まるめがね)」をオープンさせた。妻はレストランを手伝い、畑では野菜を育てている。オリーブ畑が一面に広がる最高のロケーションで、レストランを営みながらオリーブの商品開発の夢をもって夫婦で暮らし、地域の人々と交流している。



・ 第 15 回オーライ！ニッポン大賞の応募者数は 109 件
(オーライ！ニッポン大賞 92、ライフスタイル賞 17)